

戦国城下図の信憑性について

小和田哲男

I 絵図研究史と若干の問題点

城下町研究は、総論的なものはもとより個別城下町も含め、近年急速に進められている¹⁾。しかし、そうした城下町研究全体としての隆盛にもかかわらず、城下図に関してはきわめて遅れた状況にあるといわざるをえない。

また、城下図に関する研究は、いきおい個別城下町の絵図についての書誌的な考察ないしは歴史地理的方法による現代都市との対比にとどまるなどの方法的問題も指摘しうる。数量的に近世城下町の絵図についての分析が圧倒的で、²⁾ 戦国城下図への論及が少ないのは、城下図の残存状況からしてやむをえないところであろう。ただ、屏風絵については、主として建築史の立場から見直しが進められていることは注目してよい。⁴⁾

また、絵図の分類方法についても矢守一彦氏の提起⁵⁾、玉井哲雄氏の提起⁶⁾がなされるなど、研究そのものの進展はみられたが、従来の城下図研究において、個別城下図の書誌学的検討に終始し、大局の見地からの分析がなおざりにされるという傾向もみられるのではないかと考えられる。

こうした問題を念頭におきつつ、戦国城下図の信憑性について検討を加えるのが本稿のねらいである。近年、各地において、古図の復刻が盛んに行われ、それは近世城下図に限らず、後述するように、戦国城下図にまでおよび、無批判的な戦国城下町の濫用ないし横行が、正しい地域の歴史理解にとってマイナスの作用も果たしていると考えるからである。

なお、戦国城下町そのものの具体的あり方については、拙稿「戦国城下町の特質」⁷⁾において

詳論しているので、ここでは省略する。

II 戦国城下図研究の現状

戦国城下町が地域の歴史認識を誤らせるということは、端的にいえば、戦国城下図が一般的に誤まった景観描写をしていることに関係する。つまり、戦国城下図の個々については、いわば研究者レベルでは、その史料の限界について明らかにされながらも、地域史叙述のレベルではそうした研究が全く生かされていないという例をいくつも目にするのである。

このことは、ただ、個々の戦国城下町の絵図を1枚1枚検討し、その史料としての性格を論ずるだけでは問題解決にはならず、戦国城下図というものが、いかなる契機によって作成されたのかという、作成意図を全体として明らかにする作業が必要となっていることを示している。また、作成意図を明らかにすることから、やはり、全体として、戦国城下図の史料性、史料的信憑性についても論じていかなければならないと思われる。

というのは、後述するように、代表的な戦国城下図といわれるものをいくつかピックアップしてみても、そこに描かれている城下景観は明らかに近世城下町のそれである。城郭を中心にした家臣団の武家屋敷が軒を連ねている様子が詳細に描かれている例が一般的である。

しかし、実際問題としてどうであろう。ここ数年、戦国城下町研究が明らかにしてきた1つの大きな成果は、戦国城下町には家臣団の集住はあまり見られなかったという点である。この点の詳細は別稿⁸⁾に譲るが、1つの例として越前の戦国大名朝倉氏の城下町一乗谷について考えてみよう。

戦国城下町一乗谷に家臣団が集住していたということは「朝倉孝景条々」（「朝倉英林壁書」、
「朝倉敏景十七箇条」とも）の第14条に規定された次の条文によって広く知られている。すなわち、

一、朝倉館の外、国の中に城郭を構へさせ間敷候、惣別分限あらん者、一乗谷へ被_レ越、其郷其村には、代官百姓計可_レ被_レ置候事、
というものである。⁹⁾「朝倉孝景条々」（「朝倉敏景十七箇条」）では最も有名な条文としてよく引きあいに出され、朝倉氏が領内の支城を破却した、いわば近世の一国一城令の先駆が見られるというのが一般的な解釈である。つまり、家臣団がこぞって一乗谷の城下に集住していたとの評価となっている。

ところがその反面で、ここ10年ぐらいにわたって大規模な発掘調査が進められている一乗谷¹⁰⁾においては、はっきりと武家屋敷として認められるのは数十の規模でしかないことも明らかである。¹¹⁾「朝倉孝景条々」にいう家臣団の城下集住と、実際の遺跡から見られる武家屋敷が数十といった規模でしかなかったという現実と、この2つの史料（資料）から生ずる乖離とは一体何だったのだろうか。

結論先取的にしまえば、「朝倉孝景条々」の読みが浅さであると考えられる。それには2つの要素があり、1つは、さきに引用した第14条の「惣別分限あらん者」への注意の不足、もう1つは第7条の規定の対比を怠ってきたことである。

まず、第14条の「惣別分限あらん者」の点から考えていこう。この部分は、写本によっては「惣じて大身の輩をば」という形になっている場合もある。まず、「分限」の意味内容から考えてみたい。「分限」の一般的説明としては次のようになる。¹²⁾すなわち、

ぶげんとも読むことがあるが、ぶんげんとぶげんでは意味内容の上でかなりちがいがあり、ぶげんは、分限者、つまり富んだ人のことをいうときに用いたという。従って、家臣の名簿である分限帳を「ぶげんちよう」と呼

ぶのは正しくない。分限は社会における身分的・経済的地位をさす言葉として用いられる。「身の程」とか「分際」といった意で、鎌倉期あたりから使用例が見られる。江戸時代、考え方として、分限に従って言行を律するということが定着し、それが封建社会に特徴的な思想ともなったのである。武士の場合は分限は禄高であらわされ、農民も持高で表現され、商人も店の大きさ、商取引の大きさなどの数値によってうかがうことができる。

ということになる。つまり、「分限あらん者」とは分限の有る者で、「大身」と同じ意である。ということは、一乗谷の城下に集住を命ぜられたのは大身の武士、すなわち重臣だけであったことが明らかである。

そのことを明確な形で物語っているのが「朝倉孝景条々」の第7条の次の規定である。¹³⁾

一、朝倉名字之中を始、年始之出仕之上着、可_レ為_二布子_一、各同名定紋を可_レ被_レ為_二付_一、分限有_レ之とて、衣装を結構せられ候者、国端在庄之侍ハ花麗に恐、貧乏之姿にて出悪なととて、構_二虚病_一、一年不_レ出、二年三年出仕不_レ仕者、虚々者、朝倉か前へ祇候之輩可_レ少事、

この第7条は一読して明らかのように、家臣に対し年始の出仕の装束について定めたもので、重臣がいい着物を着て出仕すれば、国端在在の侍、すなわち国のはずれの方に在郷している家臣が自らの貧乏なみなりをはずかしく思い、次第に出仕しづらくなるので、布子に定めるといった内容である。

全家臣団が一乗谷に集住したものではなかったことがここからうかがわれ、さきの第14条の規定ともあわせ考えると、一乗谷には「分別あらん者」、「大身の輩」のみが集住し、他は在郷していたことがうかがわれるのである。そのように理解すれば、一乗谷城下の武家屋敷が数十戸というのとも何ら矛盾をきたさない。

「分限あらん者」、「大身の輩」、すなわち重臣のみが城下に集住していたのは、戦国大名の評定衆の制、奉行人の制と密接な関係をもつ。訴

訟の裁決、行政一般に、これら評定衆なり奉行人が実際に政治上の実務担当者として城下に詰めて与えられた職責を果たしていたからである。その他には、直臣団としての御馬廻衆なども集住しており、輪番制で交代で城下に詰めるという制度をもつ戦国大名もあった。

以上見てきた一乗谷のような例が戦国城下の実際の姿であったと考えられる。こうした実態と、世に戦国城下図として流布しているものに描かれている城下景観とはかなりのへだたりがある。戦国城下に全家臣団が集住していたように描く戦国城下図が誤りであることについては、これまでもいくつか指摘はなされてきた。しかし、どうしたわけか、地域史の叙述や概説書などでは、それら戦国城下図が、いかにも当時のもの、すでに戦国期に相当の繁栄をしていたものとして、その説明のために引きあいに出されているのが現状である。

以下、代表的な戦国城下図のいくつかにつき、その非歴史性について明らかにしよう。まず、越後春日山から。

越後春日山 上杉謙信の居城地として知られる春日山の場合、林泉寺所蔵の「春日山城古図」¹⁴⁾が広く流布し、その他にも何種かある。城郭の部分は矢守氏の分類に従えば景観図的手法をとり、城下町の部分は平面図的手法をとり、城下に家臣団の武家屋敷の屋敷割が詳細に記されており、城郭部分、すなわち山の中腹部分にも武家屋敷が点在して描かれている。

図を見る限りでは、戦国期の山城の城下町の面影を髣髴させるに十分であり、いかにも戦国期の春日山城下の繁栄を語るにふさわしい図柄となっている。しかし、すでに見てきたように、この時代、全家臣団の城下への集住という現象はまだ見られない。この点につき、最も明快な形で「春日山城古図」の史料批判を試みたのは小村弼氏である。氏は、「春日山城下町の成立」¹⁵⁾において次のように述べている。

元禄7年の「春日山古城図」(米沢図書館蔵)は「従=平平大蔵大輔殿御家来-来」の奥書

があり、この種の古城図の内では最も古い、山麓城下の侍屋敷町を大字岩木一中屋敷一大豆一春日を結ぶ線の山側(内側)に設定し、上杉氏屋形跡と推察される大字中屋敷はその線の外側に描いていて、その点で承服し難い。堀時代城下町の規模より暗示をうけてはいないだろうか。次に世上流布の春日山古城絵図は概ね城下町を描かないが、山麓より、東は関川東岸門前村まで、南は正善寺・岩木・山屋敷・藤巻まで、北は府内海岸まで邸郭・侍屋敷・山屋敷が続いていたという伝承もある(頸城郡誌稿廿一)。そして明治11年清水佳之助氏が上杉氏臣従時代の先祖より伝わるものとして明治天皇北陸巡幸の際天覧に供し、その後希望者にも印刷配布したものは(明治26年9月19日印刷、著作兼発行者清水佳之助、印刷者高橋有吉)これと連関があると思われるが、謙信や景勝の館をはじめ、諸士の屋敷・馬場・蔵役所・町屋まで詳記して余す所がない。しかし、本図をつぶさにみるに、諸士屋敷の肩に記す俸禄高は、「目録」(「文禄三年定納員数目録」)の高の数倍にのぼり、後世の臆測たること明らかである。

長文にわたる引用になってしまったが、「春日山城古図」の史料性について現在のところ、この指摘が出るものはない。文中明らかなように、後世の臆測による創作、堀時代、すなわち近世城下町景観に暗示をうけた創作であったことがうかがわれるのである。

「春日山城古図」に描かれた部分を現在の地図に置き直してみると、そこに武家屋敷空間を認めるのが困難であることも小村氏の主張を裏づけている。なお、地籍図によって、春日山城の麓、すなわち「春日山城古図」の武家屋敷地帯にあたる部分に、「御中屋敷」・「柳大門」・「土井ノ内」・「鉄砲町」・「大ノ町」といった小字¹⁶⁾があり、平時の上杉氏居館地および御馬廻衆の人々の屋敷地があったことがうかがわれる。

おそらく、「土井ノ内」^{かこい}あたりに重臣の屋敷がいくつかあり、あとは近江六角氏の観音寺城における郭配置と同じように、山の中の小さな

郭ひとつひとつが重臣屋敷ともなっていたのであろう。

周防山口

次に大内氏の山口城下についてみよう。「東の小田原、西の山口」といわれるように、戦国城下町の繁栄ぶりを語る際には常に引きあいに出される場所である。

しかも、その繁栄ぶりを裏書きするかのような「山口古図」というものが存在するのである。この「山口古図」は、明治22年以来、山口でキリスト教の伝道にあたったフランス人のヴィリヨン神父という人が、ザビエルの山口での布教の遺蹟を調査・研究していった途中で発見したものといわれ、明治26年頃、山口の旧家安倍家の蔵書の中から見出し¹⁷⁾たという。現在、山口県文書館所蔵の「山口古図」や、毛利家文庫所蔵の絵図などは、いずれも安倍家所蔵の絵図を複写したものである。もっとも、安倍家所蔵の原本の方は現在、所在不明となっている。山口県文書館所蔵の「山口古図」は、複製されて容易に手にすることができる。

ところで、この「山口古図」をめぐるのは、従来の研究においても評価は2つに分かれて¹⁸⁾いる。たとえば、松山宏氏は、

山口文書館所蔵に「山口古図」がある。近世はじめの作かといわれるのだが、大内時代の府城山口の状景をしのぶことができる。これによると、大殿御殿とその北に大内御殿つまり築山館がある。両殿の周辺に、陶・鷲頭・内藤・杉・冷泉・吉見・竹原氏などの庶族・重臣などの邸宅がならび、すこしはなれて高橋・入江・長崎・藤原・忠川・岡部・弘中・小方・山崎・深野・二宮氏などの諸屋敷もみえる。

大殿御殿の南正面に大殿大路がある。またその西側を南北に堅小路がはしり、その南端が石州街道に合し、そこから西に伸びる町筋が大町である。大町筋には大市町・中市町・晦日市・十日市などがある。堅小路や大町筋には分岐した横町が縦横に交錯しており、それに鞍馬小路・久保小路・馬場殿小路・太刀売町・諸願小路・銭湯小路・相物小路・立

売・御局小路・糸米小路などがある。太刀売町・相物小路・立売・糸米小路などには商工業者がいたものと思われる。武士の住むところと商工業者の住むところは、近世ほどではないが相対的に区別されているようである。と、「山口古図」に全面的に依拠しながら大内氏時代、すなわち戦国期の山口の景観を述べている。「大内時代の府城山口の状景をしのぶことができる。」という考え方はかなり一般的で、前掲、石川卓美氏も、「大内時代の府城山口の態様が、如実に想察できるのがこの“山口古図”である。」とし、後世の加筆部分に注意さえすれば、「この図の史料的価値は尊重すべく、大内氏治下の山口市街の様相を想察すべきである。」とする。

これらに対し、「山口古図」の史料的価値を真向から否定する見解もある。たとえば、野村晋城氏は、²⁰⁾

今日山口図書館に、大内氏時代の山口絵図と称するものが二幅所蔵されて居るが、これは明らかに江戸時代の偽作であって、採るに足らない。何となれば、山口の郷土史家御菌生翁甫氏も指摘して居られる通り、図中に慶長19年以後の称たる大通院（戦国時代は勝音寺と言う）を載せ、その他諸寺の位置も概ね戦国時代のものではなくて、江戸時代のものだからである。

と述べ、「山口古図」の信憑性を「採るに足らない」ものと決めつけている。なお、最近では、中部よし子氏もこの野村説に賛意を表して²¹⁾おり、「山口古図」の史料的価値を否定している。

私なりの結論としては、図そのものは近世の創作であり、近世の山口の町並を基本に「中世はこうであったろう」といった式に大内氏関係の遺蹟を書きこんでいった想像図であると考え。ただ、前述の越後春日山や、後述する武蔵鉢形の絵図と異なり、城下への家臣団の集住が重臣にのみ限られている点は、戦国城下町のありうべき姿を示しているようで興味深い。

というのは、すでに朝倉氏の一乗谷のところ²²⁾で述べたように、城下には全家臣団の集住は見

られず、領国経営の執行機関として、評定衆なり奉行人なりの形で重臣が戦国大名の城下に屋敷地をもち、本領にも本拠の城をもつという形が一般的に認められるからである。この点大内氏は史料的に確かめることができ、大内氏の場合、そうした執行機関の人々を奉行人の名でよんでおり、「大内氏掟書」の中に「奉行人掟条々²²⁾」というのがあって、当時の奉行人についての規定が見られるのである。すなわち、

一 奉行人数^{次第不同}

高石三河守	重幸
宇野主計助	弘喬
飯田安芸守	貞家
高石彦右衛門尉	忠幸
神代左馬允	貞綱
尾和兵庫允	武親
門司下総守	能秀 ^(黒)
杉孫右衛門尉	弘一有 ^(興) 禪
伴田大炊助弘	弘一有 ^(興) 禪
見嶋彦右衛門尉	弘康

一 毎朝致_二出仕_一、或御世務方令_レ相_二一談之_一、或御沙汰方事、内々致_レ披_二一露之_一、毎月六箇度御評定式日、経_二衆儀_一可_レ議定_二事_一、

一 毎朝若依_二病氣_一、奉行人之内、不_レ能_二出頭_一者、可_レ捧_二起請文_一、又難_レ去私用之時者、可_レ言_二一上子細_一事、

一 御沙汰事、毎月六ヶ度御評定式日之前日、内々可_レ請_二上意_一、毎度至_二式日_一経_二上裁_一之間、御沙汰御決断延引不_レ可_レ然事、

一 毎月六ヶ度御評定式日者、奉行各終日可_レ致_二祇候_一、御評定相初時刻、可_レ為_二四時_一也、被_二相定_一上者、奉行出仕事刻事、又限_二此式日_一、御評定衆同時、可_レ致_二出仕_一事、

文明十三年三月五日

とあり、文明13年(1481)段階において、大内氏は奉行人が10名と定められていたこと、その奉行人の評定の内容として「御沙汰方」すなわち訴訟関係だけでなく、「御世務方」すなわち所務方もあったことが明らかとなる。しかも月

6日の日が決められた式日評定のやり方で、この点は今川氏など他の戦国大名の評定会議のやり方と同じで興味深い。決められた評定会議の日は、^{よつどき}四時、すなわち午前10時には評定所へ出ていなければならない、その点からも、本貫地に居住したままでは不可能なことであり、城下に屋敷をもつ必然性があったのである。

「山口古図」に見える家臣団の集住状況が、戦国城下町のありうべき姿を示しているといったのはそのような意味からである。

土佐中村 戦国城下図の信憑性を検討するに際し、1つの方法論を確立されたのは島田豊寿氏の土佐中村の古図²³⁾についての研究であろう。

土佐中村は、応仁2年(1468)、関白一条兼良の子教房が、応仁の乱で荒廃する京都を離れ、土佐国に下向し、そのまま土着し、戦国公家大名となって以来の居城地としたところである。もともと、土佐国幡多荘(現、高知県幡多郡一帯)が建長2年(1250)以来、一条氏の荘園となっていたからであるが、教房は幡多荘の中村の古城を改築し、その屋形は幡多御所、あるいは土佐御所(中村御所)とよばれていた。以来、房家一房冬一房基一兼定一内政一政親というように6代100年にわたって西土佐に君臨し、土佐国司と称され、戦国時代に長宗我部氏に滅ぼされるまで土佐の一大勢力として存続し続けたのである。中村はその一条氏の城下町であった。

「一条氏時代中村図」は、その時代の中村の町を描いたものといわれてきた。しかも、図を見ると、碁盤目状に近い街路に家臣団の屋敷が整備と区画され、現在、「土佐の小京都」などとよばれる都市プランがしのばれるのである。

しかし、前述した通り、戦国時代の一条氏の城下町に家臣団がかなりの密度で集住することはありえない現象である。島田氏は、この点を「長宗我部地検帳」、特に「天正十八年中村郷地検帳」をもとに、明確な「一条氏時代中村図」の史料批判を試みたのである。氏は、「天正十八年中村郷地検帳」に出る一条氏時代中村の有力給人ヤシキを検出し、

それによると一条氏時代の中村城下町における給人屋敷は、中村御所を中心としてその大部分は御所の南より西にかけての丘陵下に、ワイラー状の群団単位に不規則に疎集し、少部分の給人ヤシキは御所の北部から東部の低地に散布しているのが確認される。これらの給人ヤシキの群団には1, ないし, 2, 3の有力給人の土居が、いわば群団核として存在する。土居は多くは「上ヤシキ」で1~3反の地積をもち、家老クラスの土居にあっては、例えば羽生土居や興土居にみられるように、被官層とおぼしき小ヤシキ群を族团的結合において掌握しているのが知られる。(中略)ともあれ、一条時代の有力給人ヤシキは、御所近辺に土居屋敷、つまり豪族屋敷の形で群团的に散在する。問題の中村城塞下前面には土居氏等の重臣ヤシキの整然たる屋敷配置は何等検出されず、一般居屋敷もさまで多くはない。居住域の点からいえば、ここはどこまでも城下の場末なのである。以上の事実は、「一条氏時代中村図」のしめすところのものとは全く異った城下町給人ヤシキの姿を、我々の前に具現するのである。図のしめすような侍町では決してなく、ましてや城塞を中心とする成層的な給人の階級別区分制はなんら認められないのである。中村城塞下には今城ヤシキのみが「地検帳」に認知されるのみで、それ以外は「一条氏時代中村図」とは全然一致しない。この図のしめす給人ヤシキ図は、潤色をこえてむしろ架空に近い配置図といつてよいのである。

と結論する。私もこの島田説の考え方に賛成である。近世になり、近世城下町のイメージを土佐中村にもあてはめ、過度な都市的景観の強調がなされたものであろう。

以上、先学の研究成果によりつつ、戦国城下図の代表例とされる越後春日山・周防山口・土佐中村の3つの城下図について概観してきた。他にも駿河府中、豊後府内、会津黒川(若松)など同類のものもあるが、ここではふれない。それぞれのところでふれたように、3つの戦

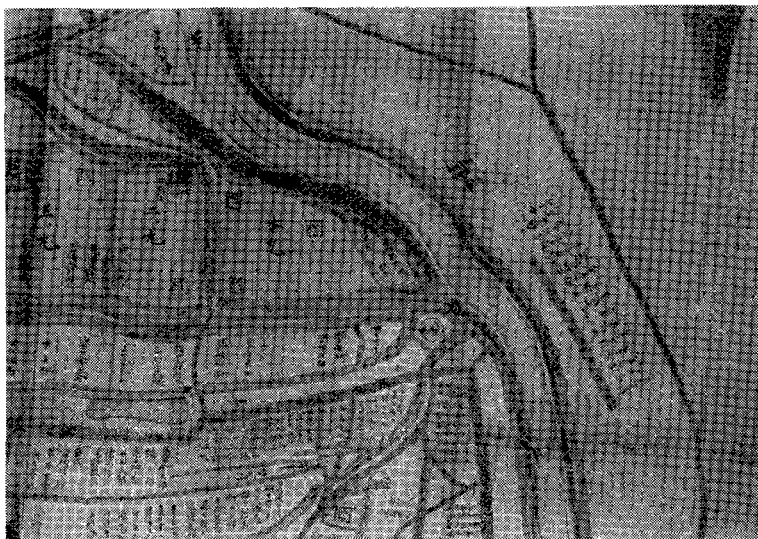
国城下図は、いずれも近世の創作であること、近世城下町の都市景観を、そのまま戦国城下町にもあてはめているという共通の性格がそこから導き出される。このことは、単にたまたま3つがそうであったというのではなく、戦国城下図に共通するものであったと考えてもいいのではないだろうか。つまり、戦国城下図の無批判的な利用はきわめて危険であるという結論である。

では、なぜそのような戦国城下図が創作されたのであろうか。創作されるからにはそれなりの理由があるはずである。以下、これまであまり検討されてこなかった武蔵「鉢形城図」を素材に考えてみることにする。

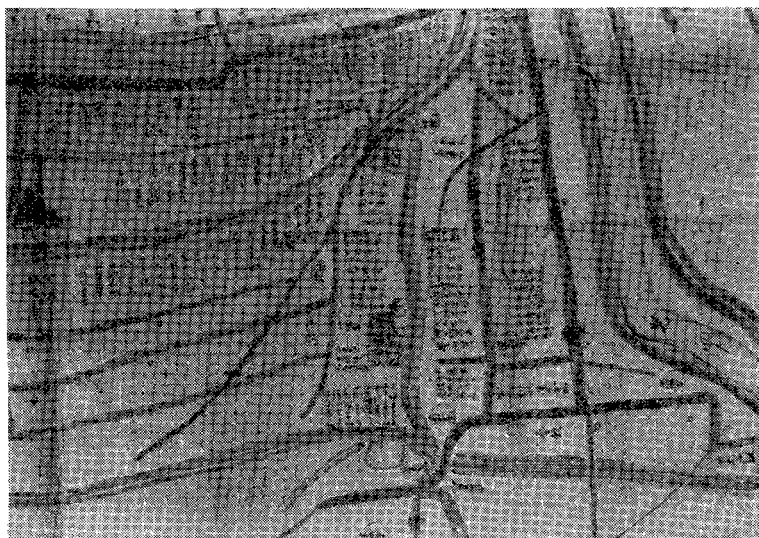
III 武蔵「鉢形城図」とその作成意図

「鉢形城図」と称するものが埼玉県大里郡寄居町を中心として数種の写本が流布している。しかも、古くより活字化され、最近では複製もされ、戦国城下図の1つの例として有名である。²⁴⁾さらに、従来より、図に描かれた城下町の家臣団の名前が注目され、すでに戦国期の城下町に家臣団の集住がみられた好例としてとりあげられてきた。たとえば、浅香幸雄氏は、²⁵⁾

城地を囲んでいる城下町は、鉢形の修築期に関連して当時の一般型を示すものであるが、町の内にも外周にも土手が見られ、本丸など中核部を同心円状に二重に取り巻いている。また諸所に寺社もあり、東入口附近と南の山丘との中間にはことに多く、寺町の名も見え、土手とともに城地防衛的使命をも併せもっているであろう。市街地的道路網にそって居住者名が記されているが、その氏名よりして武家と考えられ、武士とその家族が居住し、外曲輪に近接して殿原小路の名もあるので武家屋敷をなしていたのであろう。また街路上の町名を見ると鉄砲小路・鍛冶小路など武器製造職人の居住を示すものがあり、また内宿や連雀小路の名もあって、旅宿や商店も考えられる。連雀小路は関東では上野厩橋の金井宿や川越・岩槻・松山本郷などにも見られるが、ここには市場商人たる連雀商人たちを取締る



写真A 鉢形城図——城郭部分



写真B 鉢形城図——城下主要部分

ことを領主から公認された頭（多くは土豪出身の地方の実力者）が居住し、市場に出入する商人たちから役銭を徴収するとともに、市場内の警察的取締をもなしていたのであった。

このように見てくると鉢形城では、まず城地の選定、城内の櫓、高い土手と水濠、城下を囲む二重の土手、城下の寺院配置などに見ると、防備は当時の程度としてはきわめて厳にされ、城下町には武士をはじめとして百姓・町人も集められていたことがわかり、

後記の近世城下町の構成要素をことごとく具備しつつあったのである。

と、鉢形城下に対する高い評価をしている。しかし、前述した朝倉氏の一乗谷の例や、越後春日山・周防山口・土佐中村の例などからしても、この時代、鉢形城下に家臣団の集住があったとは考えられないのである。この点について、すでに若干ふれたことがあるが²⁷⁾、もう少し詳しい論証を試みたいと思う。

まず、家臣団の城下集住の有無を確かめるた

め、「鉢形城図」に記載された家臣名の検討を行うことにしよう。「鉢形城図」には、本丸のところに北条氏邦の名がみえ、二ノ丸のところに秩父孫次郎の名が記されている。以下、三ノ丸には黒沢上野介をはじめ7名、笹郭には水野新左衛門、御殿下曲輪には瀬下丹後以下5名、逸見曲輪には浅見伊賀以下7名がみられ、これらはいずれも鉢形城内居住で、重臣ということになる。

「鉢形城図」は、さらに、城の外、すなわち「城下町」に、小西主水以下275名の名を列挙しているのである。

これは峰岸太逸氏所蔵の「鉢形城図」²⁸⁾をもとにしたが、写本によって人名の異同はいくつかみられ、また、この図でも、浅見源五郎や茂木内記のように明らかに重複しているものもみられるが、とにかく総計296名の鉢形城下集住の家臣名が列挙されているのである。

さて、この296名家臣名の信憑性がまず問題となる。北条氏邦発給の文書は永禄7年(1564)から天正18年(1590)まで178点を数えるが、宛名なり文書中に見える氏邦の家臣の名は208名を数えることができるのである。ところが、この208名と「鉢形城図」に見える296名とを対比してみると、次の表のようにわずか7名しか一致しない²⁹⁾。

この一致率の低さは何を語るものであろうか。しかも、296名の「鉢形城図」収載の家臣名が「鉢形家臣分限録」収載の家臣名とむしろ符合するという事実は、「鉢形城図」作成の意図を考える場合、看過することのできない点である。

「鉢形家臣分限録」の史料性格については

氏邦発給文書	「鉢形城図」
朝見伊賀守	浅見伊賀
黒沢上野守	黒沢上野介
秩父孫二郎	秩父孫次郎
本郷越前守	本郷越前
町田土佐守	町田土佐守
水野新右衛門	水野新左衛門
山口上総守	山口上総

³⁰⁾別稱に譲るが、この「鉢形家臣分限録」を「小田原衆所領役帳」と同じ性格のものとするのは明らかに誤りである。「分限録」の方は同時代の成立ではなく、近世になってその当時、鉢形北条氏の遺臣と称する家々を調べあげ、それを素材として本国・貫高などを付加していったものと考えられる。しかも「分限録」の特徴は、鉢形開城後、落ちのびた先まで記されているのである。

そこには、北条氏邦の家臣で、鉢形城下に屋敷をもっていた者が、鉢形開城後に落ちのびたことを物語らせようとする意図が働いていたものと推測される。現在でも「鉢形落人」といったいい方をするが、北条氏邦没落後、鉢形城下の武家屋敷を捨て、それぞれの土地に落ちのびたことを説明しようとする意識がうかがわれるのである。

しかし、戦国大名の段階、織田信長以前には、明確な形で常備軍団が形成されていたわけではなく、兵農未分離の、すなわち、平時には農業経営にタッチし、戦時に定められた軍役によって参陣なり在城するという態勢であったことが明らかである。つまり、北条氏邦の家臣団たちは、常時、鉢形城下に詰めていたわけではなく、鉢形城かあるいはその支城に一朝有事の際に馳せ参ずるしくみだったのである。

「鉢形家臣分限録」および「鉢形城図」は、そうした兵農未分離という戦国時代の様相を理解していない近世の好事家が、江戸時代的な家臣のあり方、城下町の武家屋敷の存在形態を念頭において作りあげた創作分限帳であり創作城下図であると考えられる。

さて、その場合の「鉢形家臣分限録」と「鉢形城図」の関係であるが、この2つに収載の人名がほとんど一致することから、「分限録」をもとに「鉢形城図」が作成されたものと考えたい。おそらく、鉢形開城後に落ちのびたということを正当づけるため、もとは鉢形城下の武家屋敷に居住していたことを納得させようとしたものと考えられる。

いずれにせよ、「分限録」「鉢形城図」に共通

する思想は、自分たちの先祖を思う念、「今は農民だが、もとは武士だった」という考えであろう。

それともう1つ、前掲の越後春日山や周防山口、土佐中村とも共通するが、江戸時代に城下町でなくなった土地に対する土地の人の一種の懐古的ノスタルジア、すなわち「古きよき時代」への憧憬ということもこうした戦国城下図が作成される大きな要因であったと思われる。

(静岡大学教育学部)

〔注〕

- 1) 拙稿「城郭関係文献目録・解題」(『日本城郭大系』別巻Ⅱ, 新人物往来社刊, 1981)
 - 2) 1960年以降の主な成果について列挙しよう。池田史郎「佐賀城下町の古地図について」(『歴史教育』8巻12号, 1960) 拙稿「近世初期城下町絵図の一考察—いわゆる“正保年間”絵図について—」(『地方史研究』88号, 1967) 拙稿「内閣文庫所蔵城下町絵図」(『人文地理』19巻5号, 1967) 松本豊寿「古地図よりみた江戸時代初頭における近世城下町の都市域の構造」(『地理学評論』30巻8号, 1955) 富原道晴「安土城古図についての諸問題」(『城』50号, 1968) 田中喜男「城下町古図について」(『金沢経済大学論集』7巻1号, 1973) 矢守一彦「米沢城下絵図について」(『史林』56巻2号, 1973) 岡村一郎「秋元時代の川越城下図」上・下(『埼玉史談』20巻2号・3号, 1973) 坂本智生「唐津城絵図—土井時代の旧城下—」(『末盧国』49号, 1974) 矢守一彦「金沢城下絵図史について」(『史林』62巻3号, 1979) 工藤利悦「“盛岡城下図”についての一考察—いわゆる“寛永図”作図の年代策定—」(『奥羽史談』69号, 1979)
 - 3) 同じく、1960年以降で、主な成果を列挙する。松本豊寿「伝一条氏時代中村図について」(『人文地理』20巻3号, 1968) 若尾俊平「駿府古絵図考」(『地方史静岡』8号, 1978) 小松栄次「安芸土居廓中図」(『土佐史談』68号, 1978) 橋本操六「旧府内城下図の信憑性」(『大分県地方史』94号, 1979)
- なお、最近、矢守一彦編『浅野文庫蔵諸国古城之図』が刊行され、戦国期の城下町がかなり詳細に描写されたものも含まれている。その「諸国古城之図」を手がかりとした戦国城下町研究がいくつか取りくまれるようになった。たとえば、市村高男氏の「関東における戦国城下町の展開—常陸国下妻城下町を中心として—」(『戦国史研究』第4号, 1982) は特に注目される成果といえることができる。
- 4) 屏風絵については肥前名護屋城図屏風が関心を集め、次のような研究がある。檜崎宗重「肥前名古屋城図と狩野光信」(『国華』915号, 1968) 内藤昌「肥前名護屋城図屏風の建築的考察」(『国華』915号, 1968) 岩沢憲彦「肥前名護屋城図屏風について」(『日本歴史』260号, 1970)
 - 5) 矢守一彦『都市図の歴史—日本編—』(講談社, 1974) 83~88頁
 - 6) 玉井哲雄「都市史研究における絵図史料の利用法について」(『地方史研究』155号, 1978) 50頁
 - 7) 豊田武・原田伴彦・矢守一彦編『講座日本の封建都市』第1巻総説篇(文一総合出版, 1982)
 - 8) 同上
 - 9) 佐藤進一・池内義資・百瀬今朝雄編『中世法制史料集』第3巻・武家家法Ⅰ, 岩波書店
 - 10) 一乗谷館址の発掘調査は1967年から始められ、当時福井県足羽町が小規模で行っていた事業を1971年に「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」として指定されたのを機に、福井県が発掘調査および環境整備事業を、福井市が史跡地の管理を行い、福井県教育委員会に附属する朝倉氏遺跡調査研究所(所長・次長各1, 所員4名)が設置された。戦国大名の城館址の発掘調査としては最大規模のものといえてよく、しかも「城戸内」とよばれる城下の主要部も発掘調査が進められているのが特徴である。第4次調査では中の御所跡、第5次では本館跡の発掘が、さらに第10次では朝倉家臣団の屋敷跡などの発掘も進められ、庭園のほか、出土品も、将棋の駒や人形、さらには焼けこげた『庭訓往来』の断簡など珍しいものが多く、戦国武将たちの生活をしのぶことができる貴重なものばかりである。各年次に出される調査報告書は、『一乗谷朝倉氏遺跡—発掘調査整備事業概報』(Ⅰ~Ⅷ, Ⅰ・Ⅱは足羽町教育委員会, Ⅲ~Ⅷは福井県教育委員会)として発刊されている。
 - 11) 松原信之『越前朝倉氏と心月寺』(安田書店), 同『朝倉氏と戦国村一乗谷』(福井県郷土新書4), 水藤真「復原された城下町—朝倉氏の一乗谷—」(『地方文化の日本史』5, 文一総合出版)などに

- くわしい。
- 12) 藤岡謙二郎・山崎謹也・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』（柏書房，1981）小和田執筆。
 - 13) 前掲注9）書
 - 14) 各書に写真版で掲示されているので見やすいが、たとえば、中央公論社版『日本の歴史』別巻2『図録 鎌倉から戦国』など。
 - 15) 藩政史研究会編『藩制成立史の総合研究 米沢藩』（吉川弘文館，1963）の第5章第1節
 - 16) 同上書に、明治28年地籍図による小字の記載がある。
 - 17) 石川卓美「山口古図解説」（『山口古図』マツノ書店，1975）
 - 18) 松山宏「大内氏の山口」（『地方文化の日本史』5，文一総合出版，1978）
 - 19) 前掲注17）書
 - 20) 野村晋域「戦国時代に於ける山口の発達」（『社会経済史学』8巻2号）
 - 21) 中部よし子『城下町』（柳原書店，1978）
 - 22) 前掲注9）書
 - 23) 島田（松本）豊寿「“伝一条氏時代中村図”について」（『人文地理』20巻3号）
 - 24) 埼玉県編『埼玉県誌』，四方田美男『鉢形落城哀史』（埼玉民論社，1957）
 - 25) 『新編埼玉県史』資料編6（中世2）付録（1980）
 - 26) 浅香幸雄「中世の集落」（織田武雄編『歴史地理』（朝倉書店，1953）
 - 27) 拙稿「北条氏邦家臣団の虚像と実像」（『新編埼玉県史だより』資料編6，1980）
 - 28) 前掲注24）書所収
 - 29) 拙編『北条氏邦文書集』（近藤出版社，1971）
 - 30) 拙稿「戦国期土豪論—北条氏邦の家臣団と村落—」（『日本史研究』125号，1972）

The Credibility of the Pictorial Maps of *Jōkamachi*
(Castle Towns) of the Sengoku Jidai (Period of Civil Wars)

Tetuo Owada

While studies concerning pictorial maps Early Modern period castle towns (*jōkamachi*) are rather advanced both quantitatively and qualitatively, studies pertaining to castle town maps of the Sengoku period (*Sengoku jidai* or period of civil wars) are comparatively backward. One reason for this is the exceeding smallness of the number of surviving Sengoku period maps in comparison with the number of existing Early Modern maps. But another equally pertinent reason is the difference in thinking regarding the significance of living in castle towns on the part of the vassals of the local lords of the Sengoku period and the vassals of the local lords of the Early Modern period. Breaks occurred in the continuity of the successive generations of vassals dwelling in the castle towns from the Sengoku period to the Early Modern period; and it is these breaks, rather than the continuity, that need to be taken into account in order to obtain a clearer understanding of the Sengoku period maps. In the Early Modern period, changes in occupation, and therefore status, took place in which former warrior lords and their followers became agricultural workers. The author concludes, therefore, that the creation of the pictorial maps of castle towns were prompted by 1 (a consciousness on the part of the vassals of former war lords that their ancestors were of the privileged warrior class and the wish to express this sense of privilege pictorially; and 2) a sense of nostalgia felt by the inhabitants of towns which, in the Sengoku period, had once been *jōkamachi* but which, at the time of the Early Modern period, were no longer so.

In this paper, the author examines the authenticity of pictorial maps of three famous castle towns, i.e., Kasugayama of Echigo Province, Yamaguchi of Suhō Province and Nakamura of Tosa Province. Finally, presenting Hachigata of Musashi Province as a case in point, the author analyses the circumstances in which the pictorial maps of the Sengoku period castle towns were made.